

第 2 章

大学生の運動経験と情動知能の関連

本章では、縦断的研究や回顧的研究の両面から、大学生の運動経験と情動知能の関連を明らかにする。第 1 節では、大学生を対象とし、約 2 年間の情動知能の縦断的な変化と運動経験との関連について検証する。第 2 節では、小学校から大学までの過去の運動経験と大学生の頃の情動知能得点の関連を明らかにする。

第 1 節．大学生の運動経験と情動知能の縦断的变化（研究 1）

1. 1 目的

Wong, Foo, Wang, & Wong (2007) は、情動知能の発達に関する研究の少なさを指摘しており、今後情動知能を高める教育方法を開発していく上で、情動知能の発達に関する研究を進めていくことの意義は大きいと指摘している。国内においても情動知能に関する研究が進められているが、情動知能の縦断的な変化について検討した研究は少なく、運動経験と情動知能を扱った研究においても、運動の所属の有無による情動知能得点の違いに関する研究（高木・緒形・真田・坂入・嵯峨，2008，岸本，2008）はされているが、運動経験と情動知能の縦断的な関連を検討した研究は、皆無である。

今後、情動知能の発達を検証していくためには、運動経験と情動知能向上の因果関係を明らかにしていくことが求められる。そのため、縦断的な研究からの検討も求められると考えられる。そこで、大学生の情動知能の縦断的な変化を検討する。また、運動経験との関連から、縦断的な変化に差があるのか検討していくことを目的とする。

情動知能は一般的に加齢に伴い向上するという見解（内山ら，2001）がある。そのため、仮説としては、大学生の情動知能を縦断的に調査すると、時系列とともに情動知能が向上する。また、運動部所属群は、ある集団で運動を継続することにより、情動知能得点が非所属群よりも向上し、非所属群は、情動知能得点があまり変化しないと考えられる。

1. 2 方法

1. 2. 1 調査対象者

調査対象者は、A大学のスポーツに関連した学科の1学年65名であった。対象者全員が、高校まで運動部に所属していた経験のある学生であり、運動経験なく大学に入学している学生は一人もないという集団である。大学入学後は、学内の運動部に所属している学生、学外で運動習慣のある学生、運動を継続的に行っていない学生もいる。入学直後の運動部所属学生は、特技推薦等で入学している学生がほとんどである。大学入学後に高校の時とは異なる競技の部活動への入部を検討する学生は、練習の見学などを行いながら検討して行くため、調査時期は、ある程度部活動への入部が確定した7月を第1回目の調査とし、その後半年ごとに調査を継続することとした。

そのため、調査対象者が1年生である2011年7月に1回目の調査を実施し、以後、2012年1月、2012年7月、2013年1月、2013年7月の計5回の調査を実施した。調査対象者の1回目調査時の平均年齢は、18.2歳 ($SD \pm 0.54$) であった。65名（男子61名、女子4名）の対象者のうち、1回目の調査での有効回答者は59名（90.8%）であり、全5回の調査で調査結果に不備があった者は除外し、全5回の有効回答者を男子39名と女子3名の42名（64.6%）とした。

調査は、集合調査法で、質問紙を用いて実施した。調査の趣旨や統計的な処理をすること、大学の成績や評価には影響のないことを説明し、協力を得られた学生に調査を実施した。

1. 2. 2 調査項目

1) フェイスシート

性別、運動歴（種目、継続期間、活動日数、活動時間、楽しさ、熱心さ、）について回答を求めた。

2) 情動知能尺度

情動知能尺度は、内山ら(2001)の情動知能測定尺度(Emotional Intelligence Scale; EQS)を用いた。EQSについての詳細は、第1章の第2節(p-11)を参照されたい。

1. 3 結果

1. 3. 1 運動経験の分析

有効回答者59名のうち、調査対象者の運動経験の特徴として、1回目の調査時に大学の運動部に所属した学生は36名（61.0%）で、種目は、野球、ラグビー、サッカー、柔道、フライングディスク、陸上、テニスなど多岐にわたる。学内での運動部には所属せずに、クラブチームなどでの運動習慣のある学生の種目も、野球、サッカー、剣道、バレーボールなど多種目が挙げられた。

5回目の調査時までの有効回答者42名のうち、運動部に所属し続けている学生は21名であり、途中で部活を退部した学生、学外の運動習慣を開始した学生、学外の運動習慣を中断した学生もいるが、調査期間中一度も運動習慣のなかった学生は一人もいなかった。つまり、運動部に所属していない学生でも、高校までの運動部活動で経験した種目を継続していたり、仲間が集まりサッカーやフットサルの大会に出たり、

運動の頻度は異なるものの、運動習慣を維持しながら大学生活を送っている集団であった。

1. 3. 2 大学生の情動知能の縦断的な変化と運動部所属要因との関連

大学入学後から約2年間の情動知能の縦断的な変化を検討するため、EQSの自己対応、対人対応、状況対応の3領域の得点とEQS合計点をそれぞれ従属変数とした。

1回目から5回目までの反復要因と、調査期間中運動部に所属し続けた運動部所属群、運動部やその他の運動習慣を継続・中断などしたその他所属群の2群に分類した所属群による二要因の混合計画分散分析を行った (Table 2, Table 3)。

EQS合計点では、交互作用は認められなかったが、所属要因 ($F(1,40)=5.14, p<.05$) と反復要因 ($F(1,40)=3.93, p<.01$) において有意差が認められた。その結果、運動部所属群 ($M=139.42, SD=5.03$) よりもその他の所属群 ($M=155.57, SD=5.03$) が有意に高いことが明らかになった。また、反復要因では、1回目 ($M=141.07, SD=29.48$) よりも5回目 ($M=156.69, SD=24.67$) が1%水準で有意に高く、3回目 ($M=145.69, SD=30.03$) と4回目 ($M=147.57, SD=29.53$) よりも5回目が5%水準で有意に高いことが明らかになった。

自己対応においては、交互作用ならびに所属要因の効果は認められず、反復要因において有意差 ($F(1,40)=2.49, p<.05$) が認められた。その結果、反復要因では、1回目 ($M=48.55, SD=10.13$) よりも5回目 ($M=53.14, SD=8.41$) が5%水準で有意に高いことが明らかになった。

対人対応においては、交互作用は認められなかったが、所属要因 ($F(1,40)=7.18, p<.05$) と反復要因 ($F(1,40)=2.87, p<.05$) において有意差が認められた。その結果、運動部所属群 ($M=47.77, SD=1.91$) よりもその他の所属群 ($M=55.10, SD=1.91$) が有意に高いことが明らかになった。また、反復要因では、1回目 ($M=49.57, SD=11.85$) よりも5回目 ($M=54.62, SD=9.78$) が1%水準で有意に高く、3回目 ($M=50.17, SD=10.52$) よりも5回目が5%水準で有意に高いことが明らかになった。

状況対応においては、交互作用ならびに所属要因の効果は認められず、反復要因において有意差 ($F(1,40)=4.37, p<.01$) が認められた。その結果、4回目 ($M=44.69, SD=12.14$) よりも5回目 ($M=48.93, SD=11.30$) が1%水準で有意に高く、1回目 ($M=42.95, SD=12.21$) と2回目 ($M=43.79, SD=12.54$)、3回目 ($M=44.93, SD=12.84$) よりも5回目が5%水準で有意に高いことが明らかになった。

Table 2 調査時期と群別の情動知能の平均値と標準偏差

	運動部所属群 ($n=21$)					その他所属群 ($n=21$)				
	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
EQS合計	132.33	135.81	141.48	138.05	149.43	149.81	157.1	149.9	157.1	163.95
	31.28	30.97	27.54	28.07	26.15	25.35	31.35	32.45	28.44	21.28
自己対応	47.19	49.62	50.1	49.52	51.67	49.9	54	51.1	52.76	54.62
	10.65	10.47	10.90	11.40	9.96	9.64	12.36	10.35	8.22	6.42
対人対応	45.48	47.05	48.05	47.14	51.14	53.67	54.67	52.29	56.33	58.1
	12.18	13.88	8.94	10.39	9.24	10.21	11.04	11.72	12.71	9.23
状況対応	39.67	39.14	43.33	41.38	46.42	46.24	48.43	46.52	48	51.24
	12.11	11.42	11.04	10.32	10.81	11.67	12.12	14.53	13.14	11.56

上段:平均値, 下段:標準偏差

Table 3 全5回の反復要因と所属要因の二要因混合計画分散分析結果

	df	EQS合計点			自己対応	
		MS	F		MS	F
被験者間要因						
所属要因:A	1	13697.22	5.14 *	運動部<他群*	428.57	1.33
誤差:S(A)	40	2663.45			323.53	
被験者内要因						
反復要因:B	4	1366.77	3.93 **	1<5**, 3・4<5*	120.06	2.49 * 1<5*
交互作用:A×B	4	259.34	0.74		15.61	0.32
誤差:B×S(A)	40	347.57			48.21	
	df	対人対応			状況対応	
		MS	F		MS	F
被験者間要因						
所属要因:A	1	2750.48	7.18 *	運動部<他群*	1926.17	3.80
誤差:S(A)	40	383.14			507.48	
被験者内要因						
反復要因:B	4	164.17	2.87 *	1<5**, 3<5*	222.45	4.37 ** 4<5**, 1・2・3<5*
交互作用:A×B	4	36.61	0.64		55.89	1.10
誤差:B×S(A)	40	57.27			50.93	

* $p < .05$, ** $p < .01$

1. 4 考察

運動経験の分析では、有効回答 59 名のうち 36 名が 1 回目の調査時に運動部に所属し、全 5 回の有効回答者 42 名のうちの半数である 21 名が 5 回目の調査時まで運動部に所属し続けていた。また、その他の学生においても、中断する時期がある学生もいたが、クラブチームや仲間との運動習慣を身につけており、調査期間中まったく運動習慣のない学生は一人もいなかった。調査対象とした学科学生は、健康運動の知識や指導についても学ぶ学科学生であったため、運動が得意で身近に感じている学生が多

いものと考えられる。

大学生の情動知能の調査結果として、内山ら（2001）は、226名の大学生のEQS得点を示している。各領域得点、ならびに合計点の平均値（標準偏差）は以下のとおりである。EQS合計点 120.28（±29.97）、自己対応 43.38（±11.37）、対人対応 40.83（±12.16）、状況対応 35.90（±12.31）である。今回の調査対象者は、運動部所属群、その他の所属群ともに1回目から5回目まで、これらの平均点よりも高い得点を示す結果となった。本多・森本（2008）は女子大学生724名を対象とし、食行動と情動知能との関係を専攻別に評価している。その結果、スポーツ専攻生が栄養学専攻生や児童学専攻生よりもさまざまな感情的課題を処理していくために必要な能力である情動知能が有意に高く、優れていることを明らかにした。その結果からも、健康運動やスポーツ指導について学ぶ今回の調査対象者が、高い情動知能得点を示したことが考えられる。

約2年間の期間を経て全5回の情動知能の縦断的な変化を、反復要因と所属群による二要因の混合計画分散分析から検討した。その結果、すべての得点で交互作用は認められなかった。しかし、自己対応と状況対応は、被験者内の反復要因による有意差が認められ、EQS合計点と対人対応とでは、被験者間の所属要因と被験者内の反復要因による有意差が認められた。

反復要因では、EQS合計点、自己対応、対人対応、状況対応で1回目から4回目と5回目の間で有意に向上していることが明らかになった。調査対象者の平均値としては、1回目の得点から2回目にかけて得点が向上するが、3回目か4回目で停滞、もしくは下降する。そして5回目で大きく向上する傾向が見られた。これらの結果は、3回目と4回目の調査、すなわち調査対象者が2年生の時の調査結果において、情動知能の得点が向上せず、停滞もしくは下降をしていることを示している。大学入学時には、新たな人間関係の中で、新たな仲間づくりを行い自他の情動の変化にも敏感になっていると考えられる。1年生で形成された仲間は、1つの集団として多くの時間を共にし、2年生ではすでに、その集団の中でのリーダーやフォロワーというそれぞれの地位が確立されていることが考えられる。また、3年生になると大学で就職のためのガイダンスが実施され、就職を意識し始めるとともに、自分自身の特徴を見つめ直すきっかけにもなると考えられる。その就職活動で実施される面接等も考慮すると、自他の情動の認知やリーダーシップなど状況に応じた情動のコントロールが求められ

ることを意識していくことも考えられる。

運動集団においては、学年があがるにつれ、チームの中心的存在になることや、先輩の指導等も経験することから、情動知能の向上への良い機会となっていることも考えられる。これらの結果は、大学生の情動知能の1つの変化を縦断的な調査から新たに示した結果と考えられる。さらに、交互作用が認められなかったことから、学内の運動部所属による有意な差はなく、大学生活としての学生全体の傾向を反映しているものと考えられる。

所属要因では、EQS 合計点と対人対応で有意差が認められ、運動部所属群よりもその他の群が有意に高い得点を示した。交互作用が認められなかったことから、1回目から5回目までの情動知能得点の向上は、運動部所属群もその他所属群もともに向上したと言える。しかし、1回目の運動部所属群の得点がその他所属群よりもとても低い状況であった。これは、運動部所属群は高校の部活動から大学の運動部活動へと環境の変化が起こり、そこで新たなスタートをしたところである。部活動の人数や環境にもよるが、野球、サッカー、ラグビーなどは特に大人数である。高校時代は主力として練習や試合に出場していた学生でも、大学1年生では、試合に出場できないことや、練習も思い通りにできないことも考えられる。そのため、部活動への不安や不満を抱く学生も多いことが考えられる。それらの要因が、低い情動知能得点を示すことになったのではないだろうか。

一方で、その他の所属群は、大学の授業を一緒に受ける仲間以外に、クラブチームなどでの大学の仲間とは異なる集団で運動習慣をともにすることが考えられる。そのため、大学の仲間以外にも幅広い人間関係を経験する場があり、愛他心や共感、対人コントロールが求められる機会が多いことが、EQS 合計点や対人対応得点が高い得点を示した1つの要因だと考えられる。豊田・森田・岡村・稲森（2008）は、大学生における他者意識と情動知能の関係について調査をし、他者意識の中でも他者の気持ちや感情などの内面情報を敏感にキャッチし、理解しようとする意識である内的他者意識（辻，1993）が、情動の理解得点と正の相関を示したことを明らかにしている。それは、他者の心情を理解することに対する関心や意識が、他者の行動の仕方や感情表現を観察する行動につながり、その結果、情動知能の中の他者の情動を認識し、理解する能力を向上させるということである。本研究によって有意な差が認められた対人対応領域も、他者の情動の理解やコントロールに関わる領域であるため、運動部所属

群よりもその他の群の方が，大学内だけでなく幅広い人間関係の広がりや，他者の気持ちへの意識が高まっていたことが考えられる．

本研究による調査においては，調査数の少なさや 1 学科を対象として調査を行っている点などからも，今後，運動・スポーツに関わりのない群との比較や，両群の初回の情動知能得点と同じ対象者を設定し，調査を継続するなどの方法も検討しなければならない．また，今回の調査では，5 回目に飛躍的に得点が上昇している傾向が見られる．今回の結果からは，調査回数を重ねることにより，得点が上昇していくのではなく，停滞や下降も見られることから，運動経験など他の要因が影響をもたらしているものと考えられるが，縦断的な研究による検討として，調査の繰り返しによる効果も検討しなければならない．

内山（1997）が指摘するように，人間にとって心身ともに健康で，楽しい日常を送るためには情動知能が必要であるという観点から考えると，大学卒業後に就職し，新たな環境の中で，様々な責任を負いながら日々生活していくためには，大学生の間に，情動知能を効果的に向上することが大いに役立つと考えられる．今後，大学においても運動経験を 1 つの情動知能の向上の場ととらえ，心身の健康を目指すことは有意義なことであると考えられる．

第 2 節 大学生の過去の運動経験による情動知能への影響（研究 2）

2. 1 目的

運動経験においては、人それぞれが様々な種目や環境を経験しており、簡単に分類することは困難であるが、それらの積み重ねが現在の運動経験に影響していると考えられる。そのため、小学生から大学生までの運動経験の積み重ねが、情動知能にどのような影響をもたらすのかを検討することは、重要な検討課題であると考えられる。しかし、運動経験と情動知能の関連を検討した先行研究（高木ら、2008；岸本、2008）においては、大学生を調査対象者とし、調査の時期の運動経験と情動知能得点を用いて分析を行っている。過去の詳細な運動経験にも遡り、情動知能との関連を検証した研究は皆無である。そこで、本研究の目的は、大学生を対象として、小学校から大学までの運動経験と情動知能の関連を分析することで、いつ頃のどのような運動経験が大学生の情動知能得点に影響を与えているのかを明らかにすることである。

小学校から中学校、高校、大学へと運動を継続していくと、その種目の専門性は高まる。そのため、運動を継続してきた群は、運動継続への動機づけや、自信が向上していることが考えられるため、大学生までの豊富な運動経験がある学生ほど、自己対応領域の得点が高いと推測される。また、他者との競争や協力、助け合いなどの密な人間関係から、対人対応領域の得点が高いとも考えられる。さらに、状況に応じてチームがまとめるように働きかけ、皆で目標に向かって努力する経験から、状況対応領域の得点が高いと考えられる。すなわち、過去の運動経験が長い大学生は、運動経験が短い大学生よりも情動知能の得点が全般的に高いことが考えられる。

また、性差においては、内山ら（2001）が対人対応領域においては、男性よりも女性が有意に高く、自己対応や状況対応においては男性の方が有意に高いことを示している。そのため、運動経験の影響はあるものの、男性の自己対応領域得点が女性よりも有意に高く、対人対応領域得点は男性よりも女性が有意に高い得点を示すと考えられる。仮説として、まとめると以下の 3 点となる。

1. 運動経験の長い大学生は、運動経験の短い大学生よりも高い情動知能得点を示す。
2. 児童期にあたる小学生の頃に運動経験があると、大学生の頃の高い情動知能得点につながる。
3. 男性は女性よりも自己対応領域得点が有意に高く、女性は男性よりも対人対応領

域得点が有意に高い。

2. 2 方法

2. 2. 1 調査対象者と調査時期

2011年6月から7月にかけて、保健・医療系学部に属する学科のうち5学科の1年生303名、ならびに他学部に属する2学科の1年生151名の合計454名(男性233名、女性221名)を対象に、授業中に調査用紙を配布し、調査への同意を得た後に一斉法により実施した。記入漏れがあったデータを除き、444名(男性228名、女性216名、有効回答数97.8%)を分析対象とした。平均年齢は18.35歳(SD±1.10)であった。

2. 2. 2 調査内容

1) 属性と運動経験

性別や年齢に加え、小学校から大学までの運動状況について、小学校から大学までの各時期にもっとも熱心に行っていた種目、各時期での経験年数、1週間当たりの練習日数、所属チームの大会最高成績、本人が出場した大会最高成績、その当時の熱心度について回答を求めた。大会最高成績の回答は、大会の規模に合わせ、「1.世界大会や全国大会出場」「2.東海大会(地区)出場」「3.県大会出場」「4.地区大会出場」「5.大会への出場なし」の5段階とし、「6.無所属」を加えて分析をおこなった。また、熱心度は、「1.熱心には行なっていなかった」「2.あまり熱心に行なっていなかった」「3.どちらともいえない」「4.熱心に行なっていた」「5.とても熱心に行なっていた」の5段階で回答を求めた。また、もっとも熱心に行っていた種目以外の経験種目についても、同様の内容で回答を求めた。

また、小学校から大学までの運動経験として、すべての種目の運動経験の年数から運動経験総年数、さらに、熱心に行っていた種目のみの合計年数として熱心な運動経験総年数、運動経験種目数も加えたものを指標とした。運動経験種目数は、合計40種目が挙がり、団体種目19種目、個人種目21種目として分類した。なお、テニスやバドミントン、卓球の団体戦があるような種目でも、実際の競技場面では、1人ないし2人で対戦する競技においては、個人種目として分類した。

2) 情動知能尺度

前述の内山ら（2001）の情動知能測定尺度（Emotional Intelligence Scale; EQS）を用いた。EQS についての詳細は、第 1 章第 2 節（P-8）を参照されたい。

内山ら（2001）は、各領域、対応因子について、社会人の職種別分析や健康観、楽観性、5 因子性格検査により構成概念妥当性が高いことを明らかにしている。岸本（2008）や守屋・島本・福林・石井（2011）においても、運動経験と EQS の各領域得点ならびに対応因子得点を用いて分析を行っている。本研究においても、EQS 合計得点、3 つの各領域得点、9 つの各対応因子得点を用いて分析をおこなうこととした。各時期の運動経験と性別が情動知能に及ぼす影響では、所属要因と性別要因による分散分析を行った。繰り返しの検定による危険率を考慮し、本節の有意差の基準を 1% 水準とした。

2. 3 結果

2. 3. 1 対象者の運動経験と情動知能

1) 運動経験の性差

小学校から大学までの運動経験に関して、女子よりも男子の方が運動部に多く加入するという報告があるため（SSF 笹川スポーツ財団，2006），運動経験の男女による差を検討するために t 検定をおこなった（Table 4）。その結果、年数、活動日数、熱心度において、小学校から高校までの要因で有意差が認められ、女子よりも男子が有意に高い値を示し、運動経験総年数と熱心な運動経験総年数においても同様の結果が得られた。また、チームと本人出場の大会最高成績では、すべての時期において、男女による有意差は認められず、運動経験種目数においても同様の結果が得られた。本研究の調査対象者においては、競技成績に差はないものの、女子よりも男子の方が、運動経験年数が長く、より多くの日数活動をして熱心におこなってきた特性が明らかになった。

2) 運動経験が情動知能に及ぼす影響

運動経験と情動知能との関連を検討するため、運動経験と EQS 合計点と 3 つの下位領域得点ならびに、EQS の 9 つの対応因子得点の相関係数を求めることとした。また、運動経験のうち男女による t 検定で有意差が認められた、年数、活動日数、熱心度、

運動経験総年数，熱心な運動経験総年数の要因においては，男女別に分析をおこなった．Table 5 にすべての相関係数を示す．

分析の結果，小学校の運動経験では，男子のみ年数と熱心度で有意な正の相関が認められた．特に年数との関連が多くみられ，EQS 合計点，下位領域では状況対応，対応因子では対人コントロール，リーダーシップ，状況コントロールの間で正の相関が認められた．

中学校の運動経験では，男子において年数，活動日数，熱心度，チーム成績において有意な正の相関が認められた．EQS の対応因子の中では，自己動機づけと対人コントロールが運動経験との関連が強いことが示唆された．また，女子では年数と熱心度において自己動機づけのみに有意な正の相関が認められた．

高校の運動経験では，男子において中学校と同様に年数，活動日数，熱心度において有意な正の相関が認められた．他の時期とは異なり，EQS 合計点と 3 領域全てに有意な相関が認められた．また，女子においても，活動日数と熱心度は自己動機づけとの正の相関が認められた．

大学の運動経験では，男子においては有意な相関は認められず，女子にのみ年数と活動日数において有意な相関が認められたが，いずれも負の低い相関であった．

小学校から大学までの運動経験総年数と，熱心な運動経験総年数では，EQS 合計点と 3 領域全てと有意な正の相関が認められ，対応因子においても愛他心以外のすべての因子と相関が認められた．ならびに EQS 合計点との間に有意な正の相関が認められた．

Table 4 運動経験の男女による t 検定結果

運動経験	男子		女子		t 値	
	M	SD	M	SD		
小学年数	2.89	1.78	2.26	2.00	3.53	***
小学活動日数	2.71	1.85	2.05	1.97	3.62	***
小学チーム成績	4.17	1.44	4.12	1.34	0.39	
小学出場成績	4.28	1.34	4.31	1.15	-0.30	
小学熱心度	3.29	1.68	2.55	1.88	4.33	***
中学年数	2.75	0.74	2.06	1.33	6.72	***
中学活動日数	5.01	1.86	3.99	2.71	4.59	***
中学チーム成績	3.68	1.45	3.58	1.37	0.77	
中学出場成績	3.89	1.33	3.82	1.23	0.57	
中学熱心度	3.75	1.43	2.88	2.00	5.20	***
高校年数	2.30	1.20	1.40	1.43	7.15	***
高校活動日数	4.69	2.56	2.92	2.97	6.73	***
高校チーム成績	3.81	1.77	4.03	1.68	-1.29	
高校出場成績	4.10	1.55	4.34	1.42	-1.70	
高校熱心度	3.39	1.92	2.13	2.21	6.40	***
大学年数	0.14	0.28	0.07	0.13	3.54	***
大学活動日数	1.00	1.83	0.75	1.54	1.62	
大学チーム成績	5.41	1.23	5.53	1.19	-1.04	
大学出場成績	5.55	0.93	5.65	0.96	-1.00	
大学熱心度	1.00	1.77	0.94	1.71	0.39	
運動経験総年数	9.45	4.23	7.19	5.08	5.06	***
熱心な運動経験総年数	8.09	2.95	5.77	3.54	7.47	***
経験種目数	2.05	1.05	1.87	1.21	1.69	

男子 ($N=228$) , 女子 ($N=216$) *** $p < .001$

Table 5 運動経験と情動知能得点の相関係数表

運動経験	性	EQS合計	下位領域			対応因子								
			自己対応	対人対応	状況対応	自己洞察	自己動機づけ	自己コントロール	共感性	愛他心	対人コントロール	状況洞察	リーダーシップ	状況コントロール
小学年数	男	.21 **	.18 **	.16 **	.21 **	.17 **	.12	.15 **	.13	.00	.22 **	.16 **	.23 ***	.20 **
	女	.05	.04	.07	.07	-.03	.08	.06	.04	.10	.06	.09	.06	.05
小学活動日数	男	.04	.08	.00	.05	.04	.07	.07	-.04	-.06	.05	.02	.01	.07
	女	-.01	-.02	-.01	.04	-.06	.01	.00	-.05	-.01	.04	.05	-.02	.06
小学熱心度	男	.14 **	.11	.07	.16 **	.06	.08	.12	.04	-.05	.13 **	.18 **	.14 **	.14 **
	女	.07	.08	.09	.06	-.02	.10	.11	.05	.13	.08	.04	.04	.09
小学チーム成績		-.05	-.03	-.02	-.07	-.02	-.01	-.03	.01	.00	-.05	-.05	-.03	-.08
小学出場成績		-.04	-.02	-.01	-.06	-.03	-.01	-.02	.02	.01	-.05	-.05	-.03	-.08
中学年数	男	.18 **	.16 **	.18 **	.16 **	.15 **	.11	.14 **	.16 **	.07	.20 **	.11	.19 **	.15 **
	女	.05	.06	.04	.07	-.02	.15 **	.05	.01	.02	.05	.07	.10	.07
中学活動日数	男	.15 **	.19 **	.15 **	.11	.10	.23 **	.16 **	.15 **	.14 **	.14 **	.10	.15 **	.09
	女	.03	.03	.06	.03	-.02	.09	.05	.04	.04	.05	.01	.09	.01
中学熱心度	男	.17 **	.18 **	.16 **	.12	.04	.23 **	.14 **	.13 **	.10	.14 **	.12	.13	.09
	女	.09	.10	.09	.08	.00	.20 **	.07	.06	.06	.07	.09	.13	.06
中学チーム成績		.09 **	.08	.11 **	.06	.04	.08	.08	.11 **	.07	.10 **	.07	.10 **	.03
中学出場成績		.09	.08	.10 **	.06	.05	.06	.08	.09	.06	.09	.07	.09	.03
高校年数	男	.18 **	.10	.18 **	.21 **	.02	.17 **	.08	.14 **	.02	.22 **	.18 **	.20 **	.18 **
	女	.02	.06	.04	-.01	-.06	.21 **	.04	.00	.03	.00	-.03	.04	-.03
高校活動日数	男	.29 ***	.24 ***	.29 ***	.27 ***	.15 **	.25 **	.17 **	.27 ***	.09	.30 ***	.29 ***	.25 ***	.20 **
	女	.03	.08	.04	-.01	-.06	.23 **	.06	.02	.02	.02	-.02	.03	-.03
高校熱心度	男	.32 ***	.26 ***	.28 ***	.31 ***	.11	.33 ***	.18 **	.24 ***	.07	.31 ***	.30 ***	.29 ***	.26 ***
	女	.05	.11	.05	.01	-.05	.27 ***	.09	.04	.03	.02	-.02	.06	.00
高校チーム成績		.02	.01	.06	-.01	.02	.02	.00	.11 **	.03	.01	-.02	-.02	-.02
高校出場成績		.01	-.01	.06	-.02	.01	.00	-.02	.09	.05	.01	.00	-.01	-.04
大学年数	男	-.05	-.08	-.03	-.01	-.09	-.03	-.05	-.06	-.01	-.03	-.06	.04	.02
	女	-.11	-.12	-.14 **	-.09	-.08	-.10	-.09	-.16 **	-.13 **	-.08	-.06	-.10	-.07
大学活動日数	男	-.02	-.07	-.01	.03	-.05	-.04	-.04	-.04	-.02	.00	-.03	.07	.06
	女	-.12	-.12	-.14 **	-.09	-.07	-.11	-.09	-.15 **	-.13	-.09	-.06	-.10	-.07
大学熱心度	男	-.04	-.06	-.04	.00	-.06	-.03	-.03	-.07	-.03	-.03	-.05	.04	.02
	女	-.08	-.09	-.10	-.07	-.05	-.08	-.06	-.11	-.10	-.06	-.04	-.08	-.05
大学チーム成績		.03	.05	.06	-.02	.02	.06	.02	.09	.06	.01	-.01	-.04	-.03
大学出場成績		.03	.05	.06	-.03	.02	.05	.02	.10	.06	.02	-.03	-.03	-.04
運動経験総年数	男	.28 ***	.24 ***	.23 **	.26 ***	.17 **	.24 ***	.19 **	.19 **	.01	.30 ***	.23 ***	.26 ***	.23 ***
	女	.01	.02	.05	.00	-.10	.14 *	.03	.02	.08	.02	.00	.03	.00
熱心な運動経験総年数	男	.23 ***	.18 **	.20 **	.24 ***	.14 **	.16 *	.15 **	.16 **	.01	.26 ***	.19 **	.25 ***	.21 **
	女	.06	.07	.07	.06	-.04	.20 **	.07	.03	.08	.05	.06	.09	.03
経験種目数		.08	.07	.07	.10 **	.03	.08	.09	.04	.02	.09	.07	.09	.11 **

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

.20以上に網掛け

2. 3. 2 各時期の運動経験と性別が情動知能に及ぼす影響

小学校、中学校、高校、大学の運動経験においてもっとも熱心に行っていた種目を対象に、団体種目所属群、個人種目所属群、無所属群に分類した所属要因3群と男女による性別要因2群を独立変数、EQSの9つの対応因子得点と3つの下位領域得点、ならびにEQS合計点をそれぞれ従属変数とする2要因の分散分析をおこなった。交互作用が認められた際には、単純主効果検定を行った。また、所属要因による主効果が認められた際には、Tukey法による多重比較を行い3群間での差を検討した。小学校から大学までの群別の人数をTable 6に示す。

また、小学校から大学までのすべての運動経験を団体種目のみ、個人種目のみ、団

体種目と個人種目経験，無所属の4群に分類した．無所属群は28名と少人数であり，信頼性も低いと考えられたため分析から削除し，所属要因3群と性別要因の2要因の分散分析をおこなった．それぞれの人数をTable 7に示す．また，分散分析の結果は，Table 8, Table 9に示す．

Table 6 各時期の所属別・性別の分布

	団体種目			個人種目			無所属		
	男子	女子	合計	男子	女子	合計	男子	女子	合計
小学校	155	84	239	41	70	111	32	62	94
中学校	140	70	210	77	86	163	11	60	71
高校	111	45	156	75	68	143	42	103	145
大学	64	23	87	28	15	43	136	178	314

Table 7 小学校から大学までの所属別・性別の分布

	団体種目のみ			個人種目のみ			団体と個人種目			無所属		
	男子	女子	合計	男子	女子	合計	男子	女子	合計	男子	女子	合計
全期間	91	45	136	35	64	99	98	83	181	4	24	28

その結果，小学校における運動経験による分類では交互作用は認められなかったが，所属要因と性別要因では主効果が認められた．所属要因では，無所属群より団体種目群が有意に高い情動知能の側面は，状況対応領域と状況コントロールであった．さらに，愛他心では，団体種目群より個人種目群が有意に高く，性別要因では，愛他心で男子よりも女子が有意に高いことが明らかになった．

中学校における運動経験による分類では，交互作用ならびに所属要因による主効果は認められなかった．性別要因においては主効果が認められ，対人対応領域と愛他心，で男子よりも女子が有意に高いことが明らかになった．

高校における運動経験による分類では，EQS 合計点，状況対応領域，状況洞察において交互作用が認められた．多重比較検定の結果，いずれも男子のみに無所属群よりも団体所属群が有意に高い結果が認められた．女子においては，所属による有意な差はなく男子の団体種目群と個人種目群の得点に近い値を示していた．その他，所属要因による主効果も認められ，自己動機づけにおいて無所属群よりも団体種目群と個人種目群が有意に高いことが明らかになった．また，性別要因においても主効果が認められ，対人対応領域と愛他心において男子よりも女子が有意に高いことが明らかにな

った。

大学における運動経験による分類では、交互作用は認められず、所属要因と性別要因での主効果が認められた。所属要因では、リーダーシップにおいて無所属群よりも団体種目群が有意に高いことが明らかになった。性別要因では、愛他心において男子よりも女子が有意に高いことが明らかになった。

小学校から大学までの運動経験の総計による分類では、交互作用は認められず、性別要因での主効果のみが認められた。性別要因では、愛他心において男子よりも女子が有意に高いことが明らかになった。

Table 8 情動知能得点の所属別および性別の平均値と分散分析結果

		男子			女子			主効果		交互作用
		団体種目	個人種目	無所属	団体種目	個人種目	無所属	所属	性別	
小学校	EQS合計	143.18	147.27	124.75	140.56	144.84	135.89	4.96	0.29	1.26
		35.20	38.57	40.64	35.02	30.90	35.45			
	自己対応	49.82	49.85	44.25	47.74	48.64	46.13	3.34	0.13	0.84
		11.94	11.60	14.25	11.78	10.97	12.13			
	対人対応	49.05	52.83	44.44	51.40	53.54	50.79	4.13	4.80	1.10
		13.72	15.17	14.17	13.30	11.53	12.41			
	状況対応	44.32	44.59	36.06	41.42	42.66	38.97	5.31**	0.18	1.30
		13.81	15.78	15.62	14.22	13.17	14.16	(無<団)		
	自己洞察	14.77	14.83	12.78	13.81	14.13	13.77	2.11	0.23	1.59
		4.35	4.36	4.69	4.38	4.27	4.15			
	自己動機づけ	14.19	14.71	13.00	14.29	14.69	13.97	1.65	0.50	0.34
		4.82	4.87	4.90	4.31	4.28	4.21			
	自己コントロール	20.86	20.32	18.47	19.64	19.83	18.39	3.24	0.94	0.35
		5.90	5.77	6.68	5.44	4.88	5.81			
	共感性	16.19	17.27	14.44	16.70	17.31	16.98	2.44	3.82	1.72
		5.65	4.78	5.13	4.60	3.90	4.37			
	愛他心	14.76	16.46	14.69	16.63	17.31	16.45	3.00**	9.87**	0.49
		4.72	4.99	3.41	4.30	4.21	4.06	(団<個)	(男<女)	
	対人コントロール	18.10	19.10	15.31	18.07	18.91	17.35	4.06	0.77	0.90
		6.23	7.69	7.58	6.51	6.09	5.89			
状況洞察	12.54	12.15	10.34	11.79	12.00	10.79	3.62	0.09	0.52	
	4.53	5.17	5.10	5.05	4.65	4.66				
リーダーシップ	13.11	14.17	11.00	12.31	12.97	12.19	5.04	0.35	2.17	
	4.22	4.72	4.32	4.16	4.00	4.30				
状況コントロール	18.66	18.27	14.72	17.32	17.69	15.98	5.13**	0.09	1.14	
	6.50	7.53	7.98	6.90	6.10	6.51	(無<団)			
中学校	EQS合計	143.66	140.47	117.64	142.13	139.98	139.73	2.49	2.08	1.80
		36.44	35.04	52.26	31.06	32.71	38.88			
	自己対応	49.81	48.66	42.00	48.50	47.16	47.07	2.38	0.23	1.23
		12.28	11.12	18.76	10.55	11.91	13.39			
	対人対応	49.71	48.91	42.27	51.83	51.86	52.12	1.11	8.07**	1.30
		13.85	14.40	16.30	13.00	11.63	13.28		(男<女)	
	状況対応	44.15	42.90	33.36	41.80	40.95	40.55	2.76	0.27	1.82
		14.19	14.36	19.85	12.46	13.83	15.64			
	自己洞察	14.76	14.45	11.55	14.11	13.63	14.05	2.26	0.37	2.36
		4.20	4.46	6.31	4.28	3.92	4.73			
	自己動機づけ	14.37	13.84	12.73	14.74	14.37	13.77	1.39	1.17	0.08
		4.85	4.76	5.42	4.40	4.30	4.04			
	自己コントロール	20.67	20.36	17.73	19.64	19.16	19.25	1.34	0.10	0.90
		6.17	5.38	8.04	4.48	5.42	6.32			
	共感性	16.38	15.96	14.27	16.97	16.84	17.20	0.59	5.14	0.87
		5.79	4.91	4.94	4.33	4.20	4.49			
	愛他心	14.87	15.42	14.91	16.59	16.98	16.80	0.49	8.79**	0.03
		4.59	4.82	4.23	4.29	4.21	4.16		(男<女)	
	対人コントロール	18.46	17.53	13.09	18.27	18.05	18.12	2.83	4.45	2.52
		6.51	6.70	8.92	6.20	5.86	6.76			
状況洞察	12.51	11.81	10.27	11.90	11.38	11.45	1.52	0.01	0.54	
	4.65	4.71	6.31	4.41	4.93	5.15				
リーダーシップ	13.28	12.99	9.64	12.71	12.44	12.30	3.52	0.87	2.40	
	4.28	4.34	5.37	3.73	4.28	4.45				
状況コントロール	18.36	18.10	13.45	17.19	17.13	16.80	2.45	0.20	1.80	
	6.65	7.17	9.33	6.07	6.19	7.60				
高校	EQS合計	145.03	144.65	125.62	138.80	142.04	140.45	3.14	0.31	3.13**
		35.02	36.29	40.46	31.32	36.34	33.58			(男 無<団)
	自己対応	50.00	49.73	45.29	47.49	48.97	46.68	2.84	0.27	0.83
		12.05	11.69	13.70	11.23	12.16	11.43			
	対人対応	50.24	50.39	43.67	51.13	52.26	52.04	2.43	7.54**	2.88
		13.51	14.83	13.80	11.76	13.43	12.27		(男<女)	
	状況対応	44.78	44.53	36.67	40.18	40.81	41.73	2.37	0.57	4.40**
		13.93	14.16	15.93	12.20	14.88	13.99			(男 無<団)
	自己洞察	14.89	14.04	14.31	13.31	13.75	14.26	0.26	2.09	1.14
		4.57	4.39	4.16	4.34	4.22	4.26			
	自己動機づけ	14.55	14.55	12.19	14.87	15.34	13.42	8.50**	2.91	0.32
		4.74	4.54	5.27	4.48	4.12	4.10	(無<個, 団)		
	自己コントロール	20.56	21.15	18.79	19.31	19.88	19.00	2.65	1.75	0.69
		5.90	5.73	6.65	4.77	5.83	5.36			
	共感性	16.73	16.28	14.31	16.80	16.91	17.11	1.64	5.46	2.64
		5.84	4.94	5.04	4.21	4.58	4.20			
	愛他心	14.68	15.79	14.76	16.38	17.12	16.78	1.60	13.98***	0.20
		4.68	4.64	4.49	3.54	4.51	4.28		(男<女)	
	対人コントロール	18.84	18.32	14.60	17.96	18.24	18.16	3.86	1.75	4.18
		6.19	7.10	6.78	6.13	6.56	6.05			
状況洞察	12.76	12.47	10.05	11.20	11.29	11.91	1.66	0.36	4.81**	
	4.54	4.53	5.28	4.35	5.14	4.81			(男 無<団)	
リーダーシップ	13.44	13.27	11.38	12.42	12.60	12.45	2.37	0.23	2.11	
	4.21	4.52	4.41	3.84	4.55	4.03				
状況コントロール	18.59	18.80	15.24	16.56	16.91	17.37	1.89	0.76	3.80	
	6.60	6.77	7.94	5.77	6.73	6.78				
大学	EQS合計	147.27	147.46	137.27	149.09	140.80	139.49	2.34	0.03	0.27
		35.02	34.77	38.18	35.97	39.22	33.20			
	自己対応	50.48	51.29	47.90	51.00	48.73	47.03	2.55	0.34	0.21
		12.29	11.97	12.37	11.33	12.83	11.53			
	対人対応	50.83	50.46	47.97	54.30	52.40	51.57	1.34	2.60	0.07
		13.77	13.18	14.56	13.72	14.53	12.19			
	状況対応	45.95	45.71	41.40	43.78	39.67	40.89	1.96	2.15	0.69
		14.18	14.83	14.68	12.64	16.12	13.88			
	自己洞察	14.83	14.07	14.44	14.48	13.47	13.87	0.57	0.71	0.02
		4.69	4.33	4.36	3.90	3.98	4.34			
	自己動機づけ	14.59	15.46	13.61	15.35	15.93	14.06	4.10	0.77	0.03
		4.61	4.44	4.98	4.65	3.81	4.22			
	自己コントロール	21.06	21.75	19.85	21.17	19.33	19.11	2.61	1.64	0.61
		5.97	5.78	6.06	4.28	6.15	5.43			
	共感性	17.22	15.57	15.74	17.00	17.73	16.92	0.72	2.29	0.83
		6.73	4.48	4.93	4.29	4.98	4.27			
	愛他心	14.73	16.07	15.00	17.39	17.60	16.66	0.91	9.94**	0.37
		4.43	3.96	4.86	4.03	4.53	4.21		(男<女)	
	対人コントロール	18.88	18.82	17.23	19.91	17.07	18.00	2.09	0.00	0.71
		5.93	6.77	7.10	6.75	7.46	6.01			
状況洞察	13.30	12.39	11.58	11.83	10.73	11.61	1.17	2.42	1.07	
	4.45	4.92	4.82	4.73	5.74	4.77				
リーダーシップ	13.95	13.86	12.38	13.91	12.13	12.34	3.93**	1.04	0.69	
	4.21	4.26	4.44	4.01	4.05	4.15	(無<団)			
状況コントロール	18.70	19.46	17.43	18.04	16.80	16.95	1.04	1.80	0.45	
	6.96	7.28	6.96	5.46	7.56	6.61				

上段; M 下段; SD

F値 ** p < .01 *** p < .001

Table 9 小学校から大学までの総計による情動知能得点の所属別

性別の平均値と分散分析結果

		男子			女子			主効果		
		団体種目	個人種目	団体・個人	団体種目	個人種目	団体・個人	所属	性別	交互作用
小学校 から大学	EQS合計	139.10	140.74	145.77	143.96	139.91	142.70	0.45	0.01	0.48
		34.87	39.46	35.81	32.87	27.99	35.64			
	自己対応	48.71	49.37	49.96	49.31	47.19	47.95	0.13	0.96	0.55
		12.30	12.00	11.68	10.86	10.37	11.92			
	対人対応	48.10	50.20	50.29	51.51	51.94	53.30	0.82	3.83	0.11
		13.17	15.56	14.12	13.26	9.71	13.42			
	状況対応	42.29	41.17	45.52	43.13	40.78	41.45	0.97	0.68	1.25
		13.83	16.38	13.90	12.96	13.09	14.17			
	自己洞察	14.66	14.57	14.57	14.44	14.00	13.73	0.31	1.42	0.19
		4.30	4.70	4.27	4.68	3.78	4.33			
	自己動機づけ	14.03	14.14	14.38	14.78	14.08	14.58	0.20	0.38	0.23
		4.94	4.78	4.67	4.17	4.18	4.24			
	自己コントロール	20.02	20.66	21.01	20.09	19.11	19.64	0.21	2.60	0.75
		5.99	5.69	5.95	4.73	5.20	5.45			
	共感性	15.76	16.43	16.60	16.89	17.20	17.10	0.46	2.38	0.15
		4.84	5.34	5.97	4.57	3.63	4.52			
	愛他心	14.53	16.23	15.28	16.62	17.08	17.10	1.60	11.73** (男<女)	0.56
		4.66	4.61	4.56	4.52	3.83	4.20			
	対人コントロール	17.81	17.54	18.41	18.00	17.66	19.11	1.19	0.24	0.09
		6.02	8.00	6.77	5.99	4.91	6.90			
	状況洞察	11.97	11.09	12.91	12.69	11.63	11.35	1.20	0.04	2.66
		4.40	5.53	4.61	4.58	4.72	4.87			
	リーダーシップ	12.75	12.91	13.48	12.69	12.56	12.57	0.24	1.00	0.40
		4.20	4.47	4.33	3.60	3.85	4.49			
	状況コントロール	17.57	17.17	19.13	17.76	16.59	17.53	1.47	0.91	0.67
		6.58	8.03	6.72	6.53	5.98	6.51			

上段;M 下段;SD

F値 ** $p < .01$

2. 4 考察

2. 4. 1 対象者の運動経験と情動知能

運動経験では、年数、活動日数、熱心度において男女による有意な差が認められた。運動経験の性別においては、女子よりも男子の方が、運動経験が長く熱心に取り組んでいた。この結果は、先述のSSF 笹川スポーツ財団(2006)の報告や、文部科学省(2011)が2010年度の体力・運動能力調査の結果として、運動習慣の減少は特に女子にみられ、年齢が上がるにつれて顕著になると報告しており、同様の結果と考えられる。したがって、小学生の時期から男子の方が運動を積極的に行う意志や、所属する環境が整っていることが考えられる。女子の運動習慣の少なさを改善するためには、児童期からも継続して運動を行っていきやすい環境をつくるためにも、女子チームの増加や参加しやすい種目の増加が期待される。

運動経験と情動知能との関連においても、性差が顕著に認められた。男子においては、小学校から高校までの多くの運動経験と情動知能との関連が認められ、小学校から中学校、高校と年代が上がるにつれて運動経験と情動知能との正の関連が多く認め

られることが明らかになった。運動経験年数や練習日数は、各年代で多くの因子と正の相関を示したことから、運動経験年数や日数の積み重ねは、高い情動知能得点と関連を示すことが考えられる。つまり、男子においては、小学校からの運動経験の積み重ねが、大学生の頃の高い情動知能得点につながることを検証された。運動経験の中でも、チームや個人の成績については、情動知能得点との顕著な関連性は示さなかった。高木ら（2008）の研究では、競技成績の高い群がそうでない群よりも高い情動知能得点であったことが示されているが、団体競技者と個人競技者の中での競技成績による検討がなされていない。そのため、情動知能得点の高かった団体競技者に高い競技成績の選手が集中していたことも考えられる。競技成績の要因よりも熱心に行っていたかの得点の方が情動知能との正の相関を示したことから、特に中学校、高校の時期は競技成績に関わらず、自分自身で熱心に取り組んでいたと振り返る経験の方が、大学生の高い情動知能得点につながっていると考えられる。競技成績が良くても熱心に取り組んでいなければ、情動知能の領域である自己への情動の気づきや、他者の情動への気づき、状況に応じたリーダーシップなどに対して、深く考えて行動することもなく、意識も高く持たないことが考えられるため、その影響だと捉えることができるだろう。

一方、女子においては、中学校と高校の年数と熱心度が特に自己動機づけとの関連を示し、運動経験総年数も自己動機づけと関連が見られた。自己動機づけは、自己の行動を目標達成に向けて維持するための動力となるものと定義されている（内山ほか2001）。当然、運動継続においてもその根幹であると考えられるため、妥当な結果と考えられる。その他の要因に関しては、有意な関連が認められなかった。

井上・三木・関矢（2009）は、男女の運動経験と日本版 NEO-PI-R をパーソナリティの数値の関連性を検討している。その結果、男子では1つの因子と11の下位尺度で運動経験との関連があったのに対し、女子では1つの因子にのみ運動経験との関連が認められたことを明らかにしている。つまり、運動経験とパーソナリティの関連は、女子よりも男子の方が関連性を示すとしている。本研究においても、男子は複数の運動経験の状況と情動知能に関連が示されたのに対し、女子は運動経験と自己動機づけにのみ関連が認められたため、井上ら（2009）と同様の結果が得られたと考えられる。また、斉藤（1994）が女子は日常から対人的な関心が強いことを指摘しており、日常的な対人関係から自他の情動への意識を高く持っていることが考えられる。つまり、

男子は日常の中で自他の情動への意識は高くないが、より熱心な運動経験を長く行うことによって、自他の情動への意識が高まり、大学生の頃の高い情動知能得点へとつながることが示唆された。

情動知能の対応因子の中で、愛他心に関してはもっとも運動経験との関連が認められなかった。愛他心は、情動知能の中では対人対応領域に含まれ、他者を思いやる気持ちで配慮や自発的援助と定義されている（内山ほか 2001）。高木・真田・坂入・嵯峨（2006）のスポーツ指導者を対象とした情動知能の分析においても、愛他心について取り上げ、一般社会を生きていくためにも重要な要素であり、スポーツ場面のみによって特別に培われるものではないとしている。本研究の結果においても、運動経験と愛他心との関連は低いという結果を支持するものとなった。

2. 4. 2 各時期の運動経験が情動知能に及ぼす影響

小学校、中学校、高校、大学の運動経験においてもっとも熱心に行っていた種目を対象に、団体種目所属群、個人種目所属群、無所属群に分類した所属要因3群と性別による差を検討した。その結果、有意な性差として、高校のみならず他の時期においても、対人対応領域や愛他心で男子よりも女子の方が有意に高い得点を示した。これは、豊田ら（2008）の他者意識と情動知能との関連の研究においても、情動知能と正の関連を示す内的他者意識が男子よりも女子が有意に高いことを明らかにされている。つまり、女子は日常生活から他者の気持ちを理解することに敏感であるため、他者の情動の理解である対人対応領域得点が男子よりも高いことが、本研究結果からも示すものとなった。

また、高校では交互作用が認められ、男子においてEQS合計点と状況対応領域、下位因子では状況洞察で、無所属よりも団体種目が有意に高いことが明らかになった。竹之内・田口・奥田（2006）は、中学・高校の運動選手のパーソナリティ発達として、自我発達に影響をもたらす要因を検討している。その結果、男子選手では「チームメイト」が自我発達に関連し、女子選手においては「チームメイト」と「部外の同性の友人」が自我発達と関連していることを明らかにしている。本研究結果では、女子の高校の頃の所属による有意な差は認められず、部外の同性の友人との関係からも情動知能を高めるような関連が考えられる。しかし、男子の無所属群は有意に低い得点を示しており、目標を共にして切磋琢磨するような身近な存在である「チームメイト」

がないことが、自己対応領域や対人対応領域を適切に使い分ける統制力として位置付けされる状況対応領域の低さに影響を与えているのではないかと考えられる。

また、高校にのみこのような結果が出たことについては、青年期の心理的特徴が関連すると考えられる。豊田・大賀・岡村（2007b）は、青年期に抱きやすい心理的特徴として孤独感を挙げ、安心できる存在と情動知能が及ぼす影響について検討している。孤独感を生み出す第1の要因は、社会的経験の不足であると指摘し、自己開示できる仲間がいることや、情動知能が高いと孤独感を抱きにくいことを明らかにしている。本研究の結果からは、男子の高校時に運動部に無所属であった対象者は、大学生の頃に低い情動知能得点を示している。この結果から、運動部活動に入らないことが社会的経験の不足を招くのか、自己開示できる仲間づくりが困難になるのかまでは明らかにすることはできない。しかし、男子の高校時に運動部に所属している対象者の方が、大学生の頃の情動知能が高いことから、安心できる存在の有無にかかわらず、孤独感を抱きにくいことが示される。そのため、男子の場合には、高校時の運動部活動経験が、社会適応や健康なパーソナリティの形成に有効なのではないかと考えられる。

その他の時期である、小学校から大学までの各時期の所属要因による3群の差の検討からは、小学校での所属要因では状況対応領域と下位因子である状況コントロールで、無所属よりも団体種目が有意に高い結果となった。また、愛他心では団体種目よりも個人種目の方が有意に高い結果となった。中学校における所属要因では1つも有意差は認められず、高校においては自己動機づけが無所属よりも個人種目・団体種目が有意に高く、大学においてはリーダーシップが無所属よりも団体種目が有意に高い結果となった。

したがって、高校生の男子においては、運動部活動の所属の要因による有意な差が認められたが、その他は、運動部所属の要因において、小学校で認められた状況対応との関連は、中学生以降でなくなることが明らかになった。さらに、小学校での所属要因で交互作用が認められなかったことから、男女ともにその影響があると言える。Newman & Newman（1984）は、中学生の時期の発達課題として、身体的成熟、形式的操作、情動の発達、仲間集団における成員性、異性関係をあげている。また、斉藤（2004）は思春期の特徴として、身体発育を通して自分自身についても関心が向けられ「自我の覚醒」が生じることや、自分と同じような境遇にいて、お互いの内面が分かり合え

る友人関係が必要だと述べている。これらの報告からも、中学生頃の思春期を経過することで、運動部活動経験の有無に関わらず、一般的に情動面での発達から自他を含んだ情動への意識も高まっていくと考えられる。しかし、その発達段階以前である小学校において、積極的な運動経験をj得ることによって、喜びや悔しさなどの情動体験から自他への関心が強くなり、情動知能が高められることが示唆される。これらの結果から、時期ならびに性差による運動経験と情動知能との関連の特徴が明らかになった。その中で、運動部所属の要因からは、小学校の心理的発達過程において、運動経験をj得ることが、情動知能の効果的な向上に影響をもたらすのではないかと考えられる。そのため、今後の研究においては、小学生を対象とした研究から、その影響を明らかにしていくことが求められる。

今回の研究方法は、調査時点での運動経験のみならず過去の運動経験についても分析に含めたことが、先行研究にはない新たな知見だと考えられる。しかし、回顧法として過去に遡って回答しているため、調査時点から遠くなれば不明瞭な点が出てくることも認識しなくてはならない。今後、長期の縦断的な研究とともに因果関係の更なる検討をしていく必要があるだろう。